



『平家物語』「先帝御入水」

『平家物語』のよく知られた個所を書きました。合戦で平家側が進退窮まると、幼い安徳天皇は、祖母の二位殿(清盛の妻)に抱かれて、「極楽浄土」へ向かうとして入水します。悲愴をきわめるこの場面をあえて淡々と起伏のすくない筆致で書いてみました。



寺山修司歌

あらゆる表現ジャンルで活躍した寺山修司の短歌には、いわゆる歌人を超えた特別なひらめきを感じます。「せつに地獄に行きたし今日も」というのはどのような境涯なのか思いをめぐらせて書きました。「赤ければ」は茂吉の歌を本歌にしているという見解もあります。



斎藤茂吉歌

現代短歌の巨匠として知られる斎藤茂

吉の作品には、古典を現代によみがえらせるような重厚な響きを覚えます。古典的な書法が歌に調和するようにも思えます。他作品より漢字・仮名ともに古典の書きぶりを直接に用いるような書き方でまとめました。



尾崎放哉句

好んで自由律俳句をよく書きます。こうした日本語を書くときに古典の書法が直接に生きることはありません。

なんらかこれまでの古典に拠る蓄積をことばのリズムに託すような格好になります。尾崎放哉の句は、ぎりぎりのところで文学としての型式を維持していて、書と特別な緊張感を生むような気がしています。

しがだい資料展示コーナー企画展

Autograph

— 中村史朗の書 —

2023.1.10 [Tue.] - 6.30 [Fri.]

第Ⅰ期 2023.1.10 [Tue.] - 2.27 [Mon.]

古典に学ぶ
— 日々の学書 —

第Ⅱ期 3.1 [Wed.] - 4.27 [Thu.]

近代の日中書法交流
— 研究と書作の間 —

第Ⅲ期 5.1 [Mon.] - 6.30 [Fri.]

シン・臨書
— 古法の再編成 —



なかむら しろう

監修 中村 史朗（滋賀大学教育学部教授）1960年生まれ
筑波大学芸術専門学群美術専攻・書コース卒、筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術（書）専攻修了
博士（文化交渉学）
日展 特選2回受賞
専門は、書学書道史（近代日中書法交流を中心とする）、漢字作品制作、漢字仮名交じりの書作品制作

第Ⅲ期 2023.5.1 [Mon.]～6.30 [Fri.]

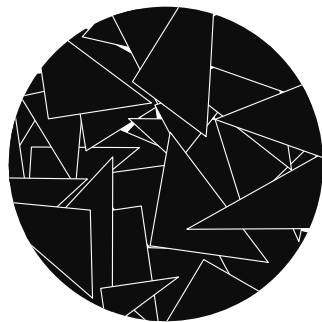
シン・臨書 —古法の再編成—

第Ⅰ期でお示ししましたように、私はいわゆる古典主義を掲げて書作に取り組んできました。作品は古典の書風に倣ったものが少なくなく、そのことに充実を感じるものの、“その風で書く”ということに、ある種の不足感を覚えるようになってきました。古典の表現力に学びながら自身の書法を築くことは常套的な手法に違いないのですが、古今の名筆を見ると古典に拠りながらも、独自の着想でその立場を乗り越えるようにして新表現が生み出される経緯があります。はじめに古典に向ける視線に、十分な思索が反映されているように思えます。

私は、日本流の“よく見て似せて書く”というところから、どのような方法で異なる臨書法が可能になるか、折を見て試してきました。そんな中で、実は最も古典表現を応用的に用いないと書けないとを感じるのが、“漢字仮名交じり書（調和体）”と言われる分野です。今日の日本語を毛筆で表現するためには、実は直接に参照すべき歴史的名品というものがありません。自由律の俳句を題材としたものを中心に、私なりの思考を作品にしています。また「破体書」「飛白書」といった一見奇抜な作風のものも出品しています。これらはいずれも 1500 年以上の歴史を有するもので、古代の資料を踏まえて今日の表現を模索したものです。

引き続きご高覧ご高批たまわりますようよろしくお願いいたします。

2023 年 5 月 1 日 中村史朗



Autograph

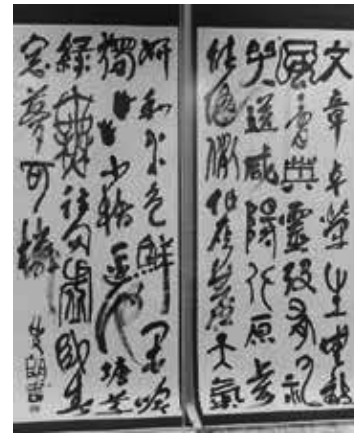
ギャラリートーク

第Ⅰ期 ... 2月15日(水)、第Ⅱ期 ... 3月10日(金)、第Ⅲ期 ... 5月16日(火)

いずれも 13:00～14:00

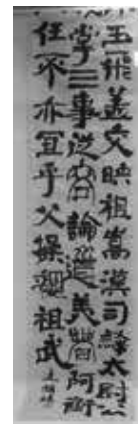
破体白楽天詩二首

破体書とは、さまざまな書体を交えながら、工夫を凝らして一つの作品をまとめ上げるものです。最後の書体である楷書が完成に向かう中で試みられるようになりました。顔真卿や空海など先達にも破体書の名品があります。いわゆる気脈感を意識して書いていますが、これまでの自分の学書の道すじが見えるようにも思えます。



臨 隋・曹子建碑

右に展示した破体書の作品が奇異に映る方も少なくないかもしれません。それは、定められた表記に目が馴染んでいるからだと思います。これは隋の著名な破体書による碑を、紙上の質感を想像しながら臨書したものです。でこぼこな文字の現れ方に、原筆者の意図を見て取ることができます。



法華経・方便品(第二)

法華経は「諸経の王」と称される通り、数多の仏典の中核に位置しています。この作品はそのほんの一部ではありますが、これまでにない写経を試みたものです。やはり破体的な書きぶりですが、淡々とその時に浮かび上がる書体・書風を書き連ねた結果で、自分なりに「率意」ということを経験できたように感じています。



「思無邪」(飛白)

飛白書による大字作品です。飛白という表現は歴史的にどのようなものであったのか判然としない面があります。私は飛白書の表現が幅広いかたちで存在していたと考えています。これは筆記具も自前で作成し、空海が唐朝からもたらした技法を意識しながら書いています。まさしく「思い邪あり」となってしまいましたが・・・。

